図57　遺跡の位置
５万分１地形図「弥彦」

図58　新谷遺跡

## 新谷（あらや）遺跡　西蒲区福井

新谷遺跡は、旧巻町と旧岩室村の境界付近に形成された小規模な扇状地に立地する。現在、遺跡は畑や水田のほか、衛生センター敷地になっている。

昭和五十八（一九八三）年、衛生センターの建設に先立って巻町教育委員会が発掘調査した。調査地は扇状地末端の八四七平方メートルで、海抜八メートル以下の低地にあたるため、住居の跡は一棟しか確認できなかった。しかし、見つかった遺物は膨大な量に上る。出土した土器は約六二〇個体。ほとんどすべてが縄文時代前期前葉（約六〇〇〇年前）のもので、布目式土器の直後に位置づけられる。土器の底部はいずれも平底で、図に見られるように、尖（とが）った工具による突き刺し文様を多用している。すべての底面に同心円状の文様が施されている点も大きな特徴である。類似した土器は北海道の南部から能登半島にいたる日本海側を中心に見られる。図五九の手前の土器は、団子のような食べ物をこねる時に使ったと考えられる浅鉢形土器である。直径一四センチメートル、高さ四センチメートル足らずの小さな器で、浅鉢としては全国

的に見ても最古クラスの資料であり、市の文化財に指定されている。

石器は製品だけで一三五四点出土した。木の実を打ち割ったり、製粉したりするのに使われた磨石（すりいし）・敲石（たたきいし）類と石皿、網漁に用いた石錘（せきすい）が多く、磨石・敲石類が計五七四点、石皿が一四七点、石錘が四〇四点であった。石鏃（せきぞく）・石槍（いしやり）は少なく、合わせて六点であった。

図59　復元された深鉢形土器と浅鉢形土器

図60　土器の底部外面の模様

新谷遺跡は、新潟県内で最も早い段階に成立した集落跡の一つであり、質・量ともに優れた遺物が出土していることから、定住的な集落であったと考えられる。ここに暮らした人々は、浅鉢や磨石、石皿の出土にみられるように、粉食の習慣があったようである。